

遊牧民とラマダン (フォト・エッセイ)

著者	常見 藤代
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	118
ページ	45-48
発行年	2005-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005673

遊牧民とラマダン

写真・文
常見藤代
Fujiyo Tsunemi



ラクダのしっぽをつかんで歩くサイーダ

二〇〇四年一月、私はエジプトの遊牧民とラマダン月の断食をするため、東方砂漠に滞在した。この年のラマダン月は一月一五日から三〇日間。さすがに一カ月間断食を行う根性はなく、最後の一日間だけ一緒に体験させてもらうことにした。

日中、飲食が禁じられているラマダン月は、日本人である私から見れば、苦行以外の何ものでもないように思える。しかし、ラマダン月が大好きだというエジプト人は多い。その理由はまちまちだ。神からの啓示が預言者ムハンマドに最初に下された神聖な月だからという人もいれば、テレビで特別番組をやっていたり、町が夜通し賑わっていて、お祭りみたいで楽しいという人もまた断食するおかげで胃腸が休まり、体の中がきれいになって良い、頭の回転も速くなるなどという人もいる。

遊牧民女性のサイーダは、ラクダ七頭を連れ、砂漠を移動して暮らしている。今回、彼女はワデイ・ファティーラという場所で、同じ部族の男性サラハとその妻スベタと暮らしていた。

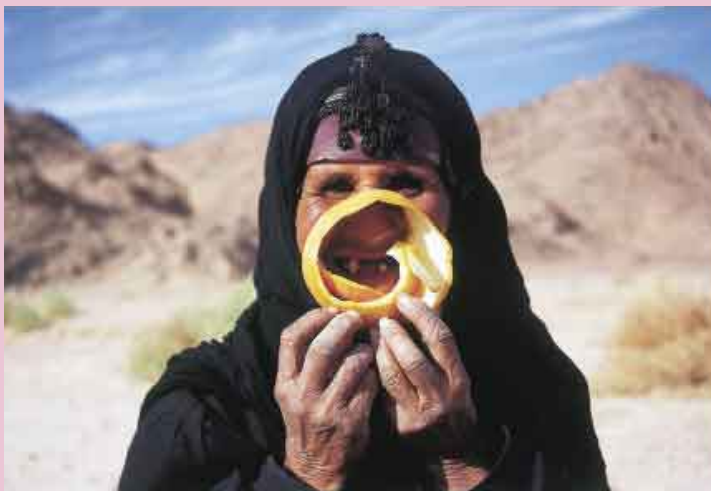
午前三時。ラジオの音と話し声で目が覚める。スフル（断食前食事）の時間だ。火をおこして紅茶を入れ、昨日の残りのパンなどを食べる。スベタはラマダン月の最初の頃、体調をくずして断食を中断しているが、二人につられるようにして起き、話に加わる。サイーダもサラハも時計はなく、夜中にラジオをつけては、しばらくして流



小山に登って遊ぶアイーダ



スベタと娘のアイーダ (5歳)



オレンジの皮でふざけるサイーダ

れる時報などを聞いて、起きる時刻かどうかを確認するという。

ラジオもなかった時代は、星の位置で時刻を知ったそうだ。夜もふけた頃、北の空に「サワービヤ」(北斗七星)が地上から昇ってくる。その七つの星のうち四つが見えたら、スフールの時間だ。夜中に目を覚ましては、星の数を数えるというのも、なかなか大変である。

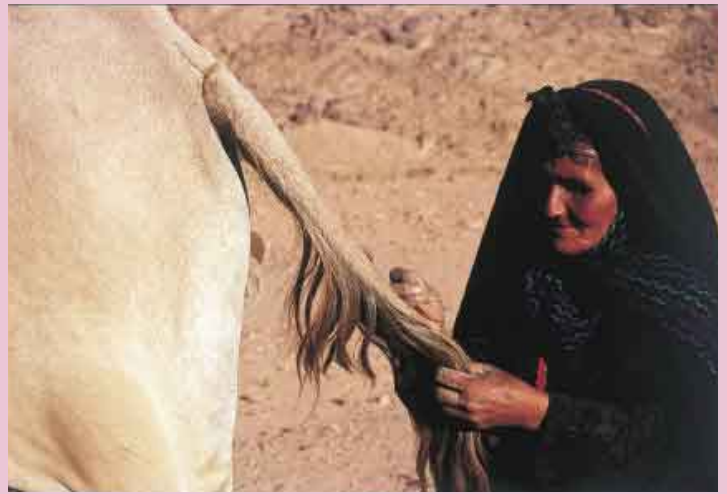
その頃は、一日五回の礼拝の時刻は自分の影を見て決めていた。正午(スフル)の礼拝は、影がいちばん短くなった時で、午後(アスル)は、影がほぼ等身大になった時、日没(マグリブ)の祈りは、腕を目の位置に持ってきて、うぶ毛が見えなくなった時というふうだ。

四時半。ラジオからファジル(夜明け)の礼拝の時刻を知らせる放送が流れると、三人そろって礼拝。これ以後、飲食は厳禁だ。その後、私もサラハ夫婦もいったん夜明けまで眠るが、サイーダは寝ないでラクダの世話をしたり、礼拝をしたりしている。「昔はスフールのあと、すぐに遊牧にでかけたものさ」という。

朝八時頃、サイーダはラクダ、スベタはヒツジやヤギを連れて、放牧に出かける。一月といっても、日中の気温は三〇度を超える。適当な木陰を選んで荷をおろし、日が高いうちは、そこで過ごす。スベタは軽い食事を作って食べ、朝早く起きたサイーダは、体力を消耗しないよう、ほとんど



サイーダの礼拝は長い時で30分くらい続く



ラクダのしっぽについた虫を取るサイーダ



日差しが強い時間帯は木陰で休む

の時間を昼寝して過ごす。その合間に時折起きては礼拝したり、おしゃべりしたりする。近くで鉱石採掘の番人の仕事をしているサラハも、時々二人の所にやってきて、雑談に加わる。

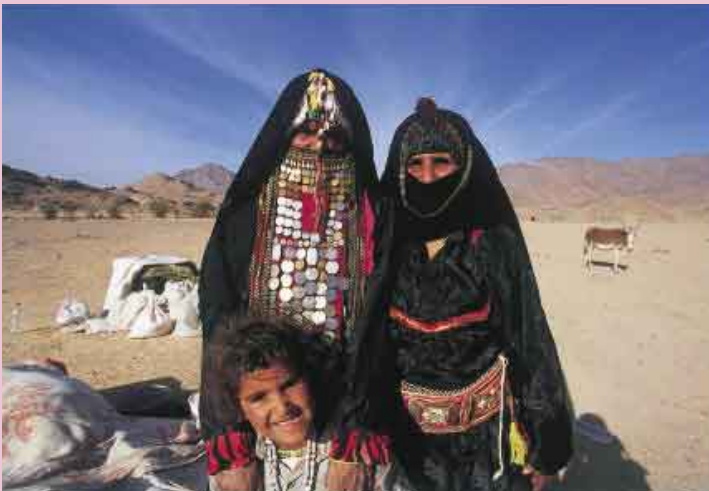
ある日、スベタが言った。「サラハはもうひとり、奥さんが欲しいんだってさ。フジヨ、独身でしょ、サラハの第二夫人になったら。」冗談じゃないと思いつながら、「え、頭に来ないの?」と言うと、「ぜんぜん。だって、もう一人奥さんがいた方が、いっしょに料理したり洗濯したりして、楽しいじゃない。」サイーダも、「そうそう。ひとりで何でもやっていると、疲れるからね」と加勢する。

日差しがようやく和らぐ二時過ぎ、木陰を出て、放し飼いにしていた動物たちを連れ戻しに行く。辺りは青い空と岩砂、そして少しばかりの木々だけの世界。砂漠に来る前に数日を過ごしたカイロでの断食を思い出す。この時間、カイロではイフタール（断食明け食事）のために家路を急ぐ車の警笛が鳴り響き、町中はパニック状態になる。それに比べて、ここはなんと平穏で静けさに満ちていることか。

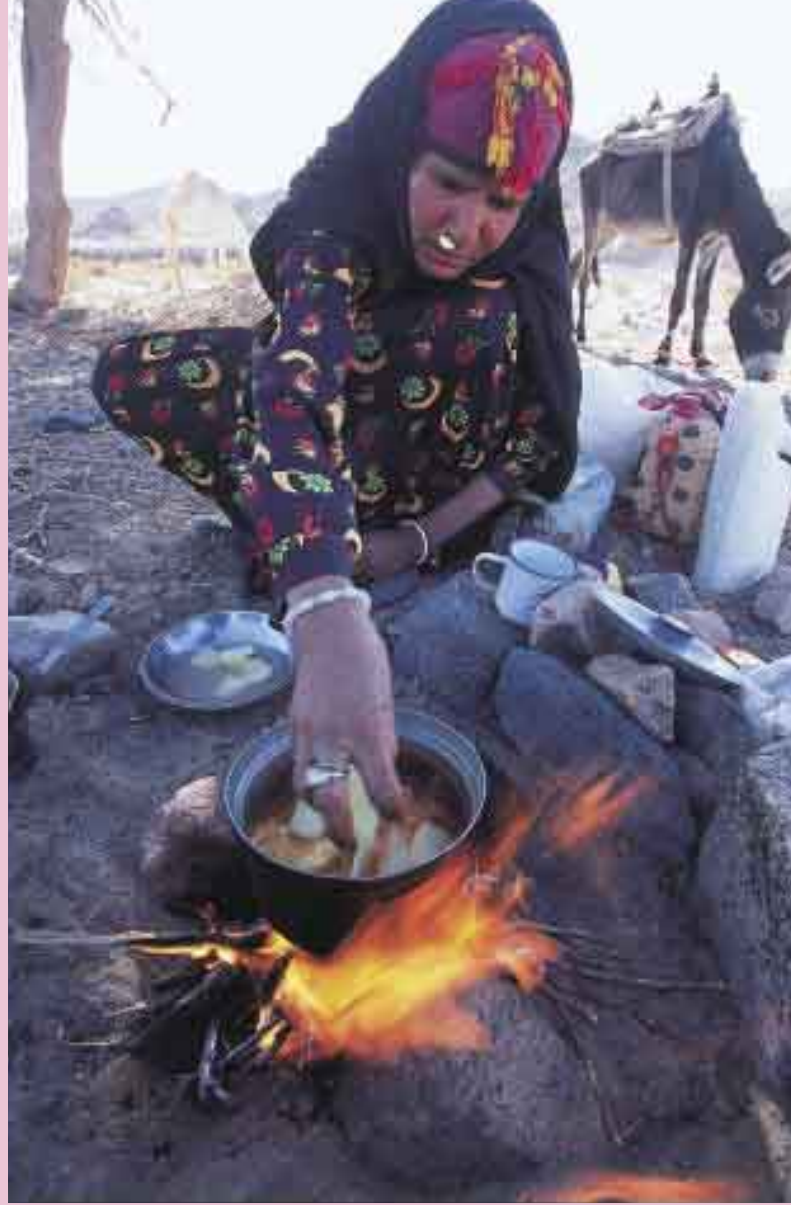
午前中に私を苦しめた空腹感は、この頃には峠を越すが、体がだるくて、力が入らない。サイーダに「お腹すかないの?」と聞くと「のどがかわくだけ」という。つらいのは気温が四〇度を超える夏だ。昼間、ずっと日陰に座り、水でぬらしたタオルを



夕暮れ時の宿営地でのサラハとアイーダ



ラマダン明けの祭りの日、正装をしての記念撮影



ジャガイモの煮込みを料理するスベタ

顔や手足にあてて、暑さを和らげるそうだ。いよいよイフタールの時間だ。町ではマグリブのアザーン（礼拝を呼びかける声）がモスクなどから鳴り響くと一斉に食事開始だが、ここでは、ナツメヤシ（予言者ムハンマドが断食明けに食べていたといわれる）を数個食べたなら、まずは礼拝。食事はその後だ。パンとジャガイモの煮込みなどの料理一品だけの質素な食事。エジプト人のイフタールには肉が欠かせないが、ここではラマダン月でも、肉を食べることはほとんどない。懐中電灯すらなく、食卓は真っ暗。皆手元が見えなくてもまったくおかまいなく、必死で食べ物に手を伸ばす。

サラハが冗談を言う。「今度来るときは、日本から女を連れてきてくれ。俺はあと三人女房が欲しいんだ」といえば、スベタも負けずに、「サラハはフジヨにやるから、今度来るときは、ゼツタイ日本の男を連れてくるんだよ」という。

遊牧民のラマダンは、日中断食することをのぞけば、普段の生活とほとんど変わらない。テレビの特番もなければ、夜中賑わうカフェやレストランもない。あるのは夜通し続く家族や友人との会話だけだ。

日が暮れて一時間もしないうちに、空は満天の星で埋め尽くされる。夜空を見上げ、まるで地球上に自分たちだけしかないような錯覚を覚えながら、私は何ともいえない幸せな気分で、彼らの話に耳を傾ける。

（つねみ ふじよ／写真家）